

中国語所有受身文の容認度判断に関わる要素

著者	陳 ?
雑誌名	言語学論叢 オンライン版
巻	11 (通巻37)
ページ	1-19
発行年	2018-12-21
URL	http://hdl.handle.net/2241/00154225

中国語所有受身文の容認度判断に関わる要素

陳 琦

要 旨

本稿では、中国語の直接受身文に現れる要素のうち、どのようなものが所有受身文で許容されるのか、また、述語のもつ使役性が所有受身文の容認度にどのように影響するのかを考察した。さらに、所有物と所有者の関係の緊密度が文の容認度にもたらす影響を分析した。

結論を以下のようにまとめる。①所有受身文の述語には、基本的に使役性をもつ動詞や複合動詞が要求される。ただし、使役性をもたないが、受影性が比較的に読み取りやすい述語であれば、許容されることもある。②所有受身文において、自立性が低い、かつ所有者と緊密な関係にある所有物を表す名詞は、許容される可能性が高い。また、そうでない所有物名詞は、数量詞や限定成分との共起により所有者との緊密度が高く読み取られることがある。

キーワード

所有受身文 状態変化 使役性 所有傾斜

1. 問題の所在

日本語には、次の(1)~(3)のような「所有者の受身文」と呼ばれる文が存在する。この類の文では、対格名詞の指示対象は主格名詞の指示対象の私物、身体部位、親族などで、広義の所有物と捉えることができる。¹

- (1) 私はすりに財布をとられた。
- (2) 私は人に愛犬を蹴られた。
- (3) 彼はならず者に父親を殺された。

一方、中国語にも上述の(1)(2)と類似する受身文が存在する。

- (4) 我被小偷偷了钱包。(私はすりに財布をとられた。)
- (5) 我被人踢伤了爱犬。(私は人に愛犬を蹴られて怪我させられた。)

しかし、次の文は、(4)(5)と同様な構造をとるものの、容認度が多少落ちる現象が観察される。

¹ 本稿で挙げる例は、出典を明示しない限り、筆者による作例である。例の和訳は全部直訳で、必ず自然な日本語文であるわけではない。

- (6) * 我被他穿了衣服。(私は彼に服を着られた。)
(7) ? 我被人踢了愛犬。(私は人に愛犬を蹴られた。)

さらに、日本語の(3)に類似する次の(8)は、先行研究で自然な文として扱われることが多いが、筆者を含む複数名の異なる出身地の母語話者の内省では、非文法的とは言えないが、かなり逸脱した表現で、強い違和感がある。

- (8) ?? 他被土匪殺了父親。(彼はならず者に父親を殺された。)

中国語学では、(4)~(8)のような、日本語の所有受身文と類似する特徴をもつ“保留賓語被動句”(目的語の位置に名詞が残存する受身文)に関する研究が散見されるが、(6)~(8)が示した容認度低下の現象の背後に働くメカニズムを扱う研究はまだ少ない。本稿では、こうした所有受身文の容認度判断にどのような要因が関係するのかを明らかにしたい。²本稿の成果は、中国語の受身文研究に新たな知見をもたらすほか、日中機械翻訳システムの品質改善などの応用場面で活用されることが期待される。

2. 述語の使役性が容認度に与える影響

本節では、述語が表す使役性(causativity)が、中国語の直接受身文と所有受身文の容認度に大きく影響することを明らかにする。また、直接受身文の述語に見られる要素が、所有受身文にも同様に使われるのかを分析する。

なお、後述の分析から、中国語の直接受身文と所有受身文の容認度には、動作対象の状態変化の有無の関わりが大きいことがわかるが、本稿では、単にその状態変化ではなく、述語動詞が表す、動作対象の状態に対する支配、という使役性に着目する。

2.1. 結果性を表す要素の顕在

まず(5)と(7)を見ると、その容認度に最も影響する要素は、動詞“踢”(蹴る)につく補語“傷”(怪我する)だと考えられる(下線部は補語成分を示す)。

² 日本語の所有受身文と中国語の保留賓語被動句とが完全に一致するものではないことに注意されたい。主格名詞と対格名詞の指示対象の意味関係により定義される所有受身文と異なり、保留賓語被動句は動詞の後に目的語がつくという統語的特徴で定義されている。例えば次のような文は、保留賓語被動句と認められるものの、所有受身文とは認めにくい。

- (i) 箱子被她捆上了繩子。(箱は彼女にロープで縛られた。)(李臨定 1980: 402)
(ii) 肉被我炒了青椒肉絲。(肉は私に炒められてチンジャオロースにされた。)
(iii) 這塊地被他們建了房子。(この土地は彼らに家を建てられた。)
(iv) 花被她澆了水。(花は彼女に水をかけられた。)(熊仁芳 2014: 134)

ここで、主格名詞と対格名詞とが所有関係をもつとは考えにくく、(4)~(8)とは異なる類の文と認めざるを得ない。本稿では、このような文を直接受身文とし、考察の対象から除く。

(9) 我被人踢傷了愛犬。(私は人に愛犬を蹴られて怪我させられた。)((5)の再掲)

(10) ? 我被人踢了愛犬。(私は人に愛犬を蹴られた。)((7)の再掲)

中国語の直接受身文には、動詞が裸の形式で現れるものも少なくないが、動詞に何らかの補語成分がつくことで構成される複合動詞を用いた文(“動補式”)が最も典型的である。この特徴について、先行研究ではほとんど「受影性」(木村英樹 1997)や「結果性」(路浩宇 2014)のような分析がなされている。王亜新(2016)では次のような記述がある。

受動文は、受影者の視点から事象を捉えるので、述語が具体的な動作よりもその動作によってもたらされた状態や変化を表している。その特徴は、特に中国語の被構文において顕著である。

中国語の被構文では述語がふつう「動詞+ α 」という形態を求めるとされている。「 α 」の部分は主として動作結果を表す要素である…(後略)

(p. 51)

ところが、ここでいう α 要素について、形式上どのような特徴があるのか、それぞれどのような意味を表すのかは、具体例に対するアドホックな分析がほとんどであり、体系的に整理されていないのが現状である。本稿の目的はその整理ではないが、なるべく全面的に、所有受身文における各々の α 要素のあり方を見ていきたい。

2.1.1. 動詞との結合度が高い補語

動詞との結合度が高い補語、いわゆる「結果補語」に、次の4種類があるとされる。この4種類は、動詞と補語の間にアスペクト辞“了”や、動詞の目的語を挿入することができない。

- ① 動作の完了や開始を表す、アスペクト辞として働くもの。
“寫完”(書き終える)、“做好”(し終える)、“吃上”(食べ始める)など。
- ② 動作の達成を表すもの。
“看見”(見た結果見える)、“咬住”(噛み付いた結果固定する)、“打中”(打った結果当たる)など。
- ③ 動作対象の状態変化の結果を表すもの。
“推倒”(押し倒す)、“打斷”(打った結果折れる)、“划破”(引っ掛けた結果裂く)など。
- ④ 動作主体の状態変化の結果を表すもの。
“吃飽”(食べてお腹いっぱいになる)、“喝醉”(飲んで酔う)、“聽懂”(聞いてわかる)など。

この①～④のうち、直接受身文で許容されるのは、②と③のみである。次に①～④の直接受身文の例を 1 つずつ挙げる。

- (11) * 飯被他吃上了。(食事は彼に食べ始められた。)³
- (12) 袖子被狗咬住了。(袖は犬にしっかり噛み付かれた。)
- (13) 腿被他打断了。(足は彼に打たれて折れた。)
- (14) * 酒被他喝醉了。(お酒は彼に飲まれて酔っ払われた。)

一方、所有受身文は直接受身文と同様な傾向を示している。

- (15) * 我被他吃上了饭。(私は彼に食事を食べ始められた。)
- (16) 我被狗咬住了袖子。(私は犬に袖をしっかり噛み付かれた。)
- (17) 我被他打断了腿。(私は彼に足を打たれて折らされた。)
- (18) * 我被他喝醉了酒。(私は彼にお酒を飲まれて酔っ払われた。)

ここから、直接受身文も所有受身文も、動詞の後につく補語について、動作の達成や動作対象の状態変化の結果を表すものが許容され、動作の完了や開始、動作主体の状態変化の結果を表すものが許容されないことがわかる。具体的に見ると次のようになる。

- (19) 吃上饭(食事を食べ始める)：“飯”(食事)の状態変化を表さない(=(15))
- (20) 咬住袖子(袖を噛んで固定させる)：“袖子”(袖)の状態変化を表す(=(16))
- (21) 打断腿(足を打って折る)：“腿”(足)の状態変化を表す(=(17))
- (22) 喝醉酒(酒を飲んで酔う)：“酒”(酒)の状態変化を表さない(=(18))

(20)と(21)のいずれも、動作主の行為によって動作対象に何らかの状態変化が生じるといふ事象を表すが、(19)と(22)のいずれも、動作対象の状態変化を伴う事象を表さない。つまり、ここでは複合動詞の意味構造に動作対象の状態変化が含まれる、という使役性をもつもののみが許容されると言える。⁴

³ アスペクト辞として働く補語のほとんどは、実質的意味を表す形容詞用法をともに持っている。これらの解釈では、タイプ③の文として許容される場合がある。

- (i) 菜被他吃完了。(おかずは彼に全部食べられた。)
- (ii) 褲子上的洞被媽媽補好了。(ズボンのかぎ裂きは母にちゃんと繕われた。)
- (iii) 門被人關上了。(ドアは人にぴったりと閉められた。)

⁴ 動補式の他動詞文が使役義を表す現象を扱う研究に、石村(2008)や秋山(2013)などがある。ただし、秋山(2013)では、上述のタイプ②の文を使役義をもたない文としている(p. 15-16)。Shibatani (1976)が提示した使役状況の定義では、causing event と caused event が前後して発生し、かつ後者の実現が前者の実現、そして

2.1.2. 動詞との結合度が低い補語

動詞との結合度が低い補語に、「方向補語」と「動量補語」と呼ばれるものが挙げられる。この 2 つの類では、動詞と補語の間にアスペクト辞“了”を挿入することができる。

⑤ 方向補語

“～上來”(上がってくる)、“～下去”(下がっていく)、“～進來”(入ってくる)、“～出去”(出ていく)、“～回來”(戻ってくる)など。

⑥ 動量補語

“～兩下”(2回)など。

直接受身文では、この⑤と⑥はいずれも許容される。例を 1 文ずつ挙げる。

(23) 我的信被郵局退了回來。(私の手紙は郵便局から返されてきた。)⁵

(24) 肩膀被他拍了兩下。(肩は彼に 2 回たたかれた。)

しかし、所有受身文の場合、次のような現象が観察される。

(25) a. ?? 我被郵局退了信回來。

b. * 我被郵局退了回來信。
(私は郵便局に手紙を返されてきた。)

(26) a. 我被他拍了兩下肩膀。

b. ?? 我被他拍了肩膀兩下。
(私は彼に肩を 2 回たたかれた。)

ここで、(25ab)がともに容認度が低いのは、そもそも“郵局退了回來我的信”(郵便局は私の手紙を返してきた)という能動文の容認度が低いことにあると思われる。なぜなら、出した手紙(返される前の手紙)はもう自分の所有物と捉えにくいからであろう。一方、(26b)の容認度が低いのは、対比の意味(例えば「たたかれたのは 3 回ではなく 2 回」)を表さない限り、動量補語を目的語に後に置かないという統語的制約がかかるためだと考えられる。

ところが、次に示すように、「肩をたたく」という事象は、「手紙を返してくる」と異なり、使役的状况ではない。使役的状况を表さない動詞を用いた直接または所有受身文の容認度

前者の実現のみに依存する場合だけ、使役狀況と認められるとしているが、本稿ではその定義に従い、②のような動作対象の位置変化を表すものも使役狀況と捉える。

⁵ 方向補語は位置変化を表すのが普通であるが、“～起來”(～だす)のようなアスペクト辞用法をもつものも存在する。この場合、タイプ①と同じく許容されなくなる。

(i) * 書被他看起來了。(本は彼に読み始められた。)

については、次の2.2.2 節で詳しく見てみたい。

- (27) 退信回來(手紙を返してくる)：“信”(手紙)の状態変化を表す(=(25))
- (28) 拍兩下肩膀(肩を 2 回たたく)：“肩膀”(肩)の状態変化を表さない(=(26))

2.1.3. 様態補語

さらに、次のような「様態補語」と呼ばれる類が存在する。この類では、補語に語だけでなく、単文も許される。また、動詞と補語の間に助詞“得”が要求される。

⑦ 様態補語

“～得傷痕累累”(傷だらけになるように)、“～得一清二楚”(はっきりになるように)、“～得引人入勝”(人を引き込むように)など。

様態補語を用いる直接受身文に次のような例がある。

- (29) 他身上被人打得傷痕累累。(彼の体は人に傷だらけになるように殴られた。)
- (30) 他被人打得身上傷痕累累。(彼は人に体が傷だらけになるように殴られた。)

しかし、次に示すように、所有受身文の場合、目的語を挿入することが文法的に不可能であるため、容認度が極めて低い(**は統語的に不可能であることを示す)。

- (31) a. ** 他被人打身上得傷痕累累的。
b. ** 他被人打得傷痕累累的身上。
(彼は人に体を傷だらけになるように殴られた。)

2.2. 動補式以外の場合

2.1 節で取り扱った動補式以外、動詞が裸の形式で現れ、補語を要求しない直接受身文も存在する。ここで主に 2 種類のもものが観察される。

2.2.1. 動作対象の状態変化を意味構造に含む動詞の場合

1 つは、動作対象の状態変化を意味構造に含む動詞である。この類の動詞は生産性が低く、使用場面も限られている(楊彩虹 2009: 6)。

- (32) 我的錢包被小偷偷了。(私の財布はすりにとられた。)
- (33) 他父親被土匪殺了。(彼の父はならず者に殺された。)
- (34) …制空權已經完全被敵方奪取。(制空權はすでに完全に敵側に奪われた。)

(BCC コーパス)

(35) 東面的華北平原地區斷裂下陷，被海水淹沒。

(東側の華北平野地区は断裂し陥没して、海水に浸されて沈んだ。)

(楊彩虹 2009: 6)

上述の文はすべて動作対象の状態変化を表すが、その状態変化は、「+α」ではなく、動詞の意味構造に含まれている。(32)の“偷”(盗む)と(33)の“殺”(殺す)の語彙的意味には、それぞれ「ものの所持者が変わる」と「相手が死ぬ」という状態変化が含まれる。一方、(34)の“奪取”(奪取する)の構成部分である“奪”(奪う)と“取”(取る)は、ともに「ものが手に入る」という状態変化を語彙的意味に含んでいる。(35)の“淹沒”(水没させる)は、構成部分である“淹”(浸ける)と“沒”(沈む)の関係が動補式に類似しており、全体が表す状態変化は“沒”の語彙的意味によって反映されている。このような動詞は、すべて所有受身文にも裸の形式で用いられる。

(36) 我被小偷偷了錢包。(私はすりに財布をとられた。)((4)の再掲)

(37) ?? 他被土匪殺了父親。(彼はならず者に父親を殺された。)((8)の再掲)

(38) …而不至於被無產階級奪取政權。

(無産階級に政權を奪われるまでにはならなかったはずだ。)

(BCC コーパス)

(39) …那棵我們經常駐足的柳樹也被洪水淹沒了蹤跡。

(我々がよく立ち止まったあの柳の木も、洪水に痕跡を消された。)

(BCC コーパス)

ここで、(37)だけ許容度が低いのは、目的語の“父親”の何らかの性質に関係すると思われるが、その議論は3節に譲る。

2.2.2. 活動動詞の場合

前節で提示した動詞以外に、動作対象の状態変化が意味構造に含まれないにもかかわらず、直接受身文に裸の形式で用いられる一部の動詞が存在する。

(40) 弟弟被人打了。(弟は人に殴られた。)

(41) 腳被人踩了。(足は人に踏まれた。)

(42) ? 肩膀被人拍了。(肩は人にたたかれた。)

(43) ? 後背被人戳了。(背中は人につつかれた。)

(44) 鬍子被人刮了。(ひげは人に剃られた。)

(45) 頭髮被人剪了。(髪は人に切られた。)

- (46) 杯子裡的水被人喝了。(コップの中の水は人に飲まれた。)
(47) 私房錢被兒子偷花了。(へそくりは息子にこっそり使われた。)

それに対し、次のような動詞の場合、上述のものと同じく動作対象の状態変化が意味構造に含まれない点では上述のものと同様であるが、直接受身文に裸の形式で現れにくい。

- (48) ?? 論文被人寫了。(論文は人に書かれた。)
(49) ?? 電腦被人修了。(パソコンは人に修理された。)
(50) ?? 玩具被小孩玩了。(おもちゃは子供に遊ばれた。)
(51) ?? 書被人讀了。(本は誰かに読まれた。)

(40)～(51)の動詞はすべて他動詞であるが、いずれも動作対象の状態変化を語彙的意味に含んでいないため、Vendler (1967)による動詞のアスペクト分類では「活動」(activity)の類に属すると思われる。しかし、このうち(40)、(41)、(44)～(47)の容認度が高く、(42)、(43)、(48)～(51)の容認度が低いということから、これらの動詞が表す状況はすべて同質的なものではないと思われる。

一方、上述の文にそれぞれ対応する以下の所有受身文について、(40)に対応する(52)の容認度が大きく落ちることを除けば、すべて同様な自然度を示している。(52)の容認度が低いのは(37)と同じ理由によると考えられるが、この点については3節で議論する。

- (52) ?? 我被人打了弟弟。(私は人に弟を殴られた。)
(53) 我被人踩了腳。(私は人に足を踏まれた。)
(54) ? 我被人拍了肩膀。(私は人に肩をたたかれた。)
(55) ? 我被人戳了後背。(私は人に背中をつつかれた。)
(56) 他被人刮了鬍子。(彼は人にひげを剃られた。)
(57) 他被人剪了頭髮。(彼は人に髪を切られた。)
(58) 我被人喝了杯子裡的水。(私は人にコップの中の水を飲まれた。)
(59) 我被兒子偷花了私房錢。(私は息子にへそくりをこっそり使われた。)
(60) ?? 我被人寫了論文。(私は人に論文を書かれた。)
(61) ?? 我被人修了電腦。(私は人にパソコンを修理された。)
(62) ?? 我被小孩玩了玩具。(私は子供におもちゃを遊ばれた。)
(63) ?? 我被人讀了書。(私は人に本を読まれた。)

上述の例で、裸動詞を用いた文のうち、成立するものと成立しないものがあり、それは動詞の意味特徴に関係すると思われる。木村(1983)では、中国語の直接受身文と対称性をもつ〈“把”+目的語+動詞+“了”〉構文について、この“了”には結果補語的な用法があり、

“掉”のように[+なくなる]という意味特徴をもつことを主張している。氏によると、[+なくなる]の意味を表す“了”は、[+なくす]という意味特徴をもつ動詞としか共起できない。氏が提示した 6 つの動詞⁶のうち、5 つは「完全になくなる」という動作対象の状態変化を意味構造に含む達成動詞で、2.2.1 節で取り扱った動詞にあたるが、残りの 1 つは“刮”(剃る)で、つまり(44)と(56)で用いられる動詞である。この動詞からは減量や消耗という状態変化の意味が読み取れるが、それは動詞の意味構造に含まれず、語用論的な解釈に過ぎない。それと類似の動詞に、(45)の“剪”(切る)、(46)の“喝”(飲む)、(47)の“花”(費やす)などがある。⁷これらの動詞は、大まかに 2 つの類に分けられるが、2 項素性(binary feature)で記すと、“刮”(剃る)、“剪”(切る)などは[+REMOVE](以下、[+REM])類で、“喝”(飲む)、“花”(費やす)などは[+CONSUME](以下、[+CONS])類である。一方、(40)の“打”(殴る)と(41)の“踩”(踏む)については、接触の意味が読み取れるが、(42)の“拍”(軽くたたく)や(43)の“戳”(つつく)のように裸で現れにくい例と区別するために、動作対象が強く当てられることから[+IMPACT](以下、[+IMP])と記す。

なお、それ以外にどのような活動動詞が受身文で許容されるかについては、網羅的な語彙調査が必要だと思われるが、本稿で扱う例の限り、上述の 3 つの類が観察される。その容認の条件について、受影性が高く読み取れる動作を表す動詞が許容しやすいと思われるが、より詳しい調査は、今後の課題とする。

2.3. 2 節のまとめ

本節では、中国語の所有受身文の述語が表す使役性を見て、どのようなものが許容されるのか、直接受身文と比較しつつ分析した。結論は次のようになる。

1 つに、所有受身文では、方向補語と様態補語が用いられる場合を除けば、基本的に直接受身文と同じく、意味構造に動作対象の状態変化が含まれる、という使役性をもつ動詞または複合動詞が要求される。

2 つに、使役性をもたない動詞が例外的に許容されることについて、所有受身文は直接受身文と同様な傾向を示している。

3 つに、動作対象が“父親”(父親)や“弟弟”(弟)のような親族の場合、所有受身文の容認度が低い。

3. 所有物の階層が容認度に与える影響

本節では、中国語の所有受身文における所有物の意味特徴を考察する。(37)や(52)が示すように、所有物の意味特徴によって、その所有物名詞が裸形式で所有受身文で許容されるか

⁶ 木村(1983: 27)が提示した動詞は、“脱”(脱ぐ)、“揭”(外す)、“拆”(取り壊す)、“刮”(剃る)、“摘”(脱ぐ)、“解”(外す)である。

⁷ “刮”や“剪”などは、日本語の「剃る」や「切る」と異なり、動作の内在的終点を持っていないため、達成動詞ではなく活動動詞である。

どうかはある程度決定されると考えられるが、それぞれの意味特徴が容認度の判定にどのような影響をもたらすかを明らかにしたい。

角田(2009)では、人間の所有物を敬語形式にすることで、その人間への敬意をその所有物を通して間接的に表現するという「所有者敬語」に関し、それぞれの敬語表現の自然さの差が所有者と所有物の間の物理的または心理的な緊密さの程度を表すとし、次のような階層を提案している。

(64) 所有傾斜:

身体部分 > 属性 > 衣類 > (親族) > 愛玩動物 > 作品 > その他の所有物⁸

(角田 2009: 127)

この所有傾斜の階層は、おそらくこのまま所有受身文に適用することができないが、これを基準にし、所有受身文においてそれぞれの所有物の振る舞いを見てみる価値があると思われる。

3.1. 身体部分

身体部分を表す所有物名詞は、次の文で示すように、裸の形式で、動作対象の状態変化が意味構造に含まれる、という使役性をもつ動詞や、動補式の複合動詞と共起することができる。

(65) 我被人踩到了脚。(私は人に足を踏まれて当てられた。)(結果補語)

(66) 他被人剪光了頭髮。(彼は人に髪を全部切られた。)(結果補語)

(67) 他被病毒感染了大腦。(彼はウイルスに脳を感染された。)(使役動詞)

また、使役状況を表さない動詞の場合、次のように、[+IMP]や[+REM]の意味を表す動詞であれば共起することが可能である([+CONS]類の動詞は、身体部分を動作対象に取れないため、ここでは該当しない)。

(68) 我被人踩了脚。(私は人に足を踏まれた。)((53)の再掲)([+IMP])

(69) 我被人打了後腦勺。(私は人に後頭部をたたかれた。)([+IMP])

(70) 他被人剪了頭髮。(彼は人に髪を切られた。)((57)の再掲)([+REM])

身体部分は、所有者である人間と一体になっており、分離することができない。したがっ

⁸ 「親族」の括弧書きについて、角田(2009)では、所有者敬語の自然度調査では相応しい例文が見つからなかった、または作れなかったためであると述べている(p. 132)。また、「親類」の位置付けについて、氏は直感で「衣類」と「愛玩動物」の間に入れるのが適切だとしている(p. 129)。

て、これらの所有物に対して行為が行われる状況は、所有者に対して行われるのと同様に捉えうる。使役状況を表さない動詞と共起できるのも、所有者と所有物とが物理的に密接しているため、所有物が動作の働きかけを受けることから受影性が語用論的に容易に推定されることにあると考えられる。

一方、(54)の“拍”(軽くたたく)や(55)の“戳”(つつく)などの軽い接触を表す動詞は、裸形式の身体部分名詞とはそのまま共起しにくい、動量補語を加えると容認度が高まる。これは、裸動詞が表す動作の働きかけが弱いため受影性が読み取りにくい、動量補語を加えることにより述語に限界性が付与され、受影性が読み取りやすくなることによると考えられる。

- (71) ? 我被人拍了肩膀。(私は人に肩をたたかれた。)((54)の再掲)
 (72) ? 我被人戳了後背。(私は人に背中をつつかれた。)((55)の再掲)
 (73) 我被人拍了兩下肩膀。(私は人に肩を2回たたかれた。)
 (74) 我被人戳了一下後背。(私は人に背中をトンとつつかれた。)

(動量補語)

3.2. 属性

角田(2009: 128)では、属性を「身長、体重、性質、健康状態、体温、血圧、身体機能(運動、反応、排せつ作用等)、意識」、さらに「名前」と定義し、身体部分と同じように、分離不可能所有物としている。これらの所有物名詞はいずれも抽象的な概念を表しているため、現実的な動作を表す述語、例えば動量補語を伴う動詞や、2.2.2 節で提示した活動動詞などを用いた述語とは共起しにくい。知覚活動を表す述語とは自然に共起可能であるが、(75a)と(75b)、(76a)と(76b)の比較からわかるように、使役性をもたない動詞を用いた文と使役性をもつ動詞を用いた文の間に容認度の差が見られる。

- (75) a. ? 他被對手抓了弱點。(彼は相手に弱点をつかまれた。)
 b. 他被對手抓住了弱點。(彼は相手に弱点をしっかりとつかまれた。)(結果補語)
 (76) a. ? 他被人記了名字。(彼は人に名前を覚えられた。)
 b. 他被人記錯了名字。(彼は人に名前を覚え間違えられた。)(結果補語)
 (77) 他被黑客竊取了身份信息。
 (彼はハッカーに個人情報を盗み取られた。)(使役動詞)

3.3. 衣類

角田(2009)によると、「衣類」に属する衣服、ネクタイ、帽子、眼鏡、靴などのものは、一般的には分離可能所有物とされるが、身につけてあるときに所有者に密着しているため、「殆ど身体部分同然」(p. 128)である。次に示すように、衣類を表す名詞は、裸の形式で使役

性をもつ動詞と共起することができるが、この点では身体部分名詞と同じ傾向を示している。

- (78) 我被狗咬住了袖子。
(私は犬に袖をしっかりと噛み付かれた。)(16)の再掲)(結果補語)
- (79) 我被釘子划破了衣服。(私は釘に服を引っ掛けられて破られた。)(結果補語)

しかし、(64)の所有傾斜で「衣類」が「身体部分」の後に置かれることから、身体部分に比べると、衣類と所有者の緊密度がそれほど高くないと認めざるを得ない。(68)~(70)で示したように、身体部分名詞は、裸形式で使役状況を表さない[+REM]類と[+IMP]類の活動動詞とも共起可能であるが、衣類名詞ではそれができない。

- (80) ? 他被人扯了衣服。(彼は人に服を引っ張られた。)([+REM])
- (81) ? 他被人打了眼鏡。(彼は人に眼鏡をたたかれた。)([+IMP])
- (82) ? 我被人踩了鞋子。(私は人に靴を踏まれた。)([+IMP])

また、(73)(74)のように、動量補語が加わることで容認度が高まる現象は、衣類名詞を用いた所有受身文では観察されない。

- (83) a. ?? 他被人拍了帽子。(彼は人に帽子をたたかれた。)
b. ?? 他被人拍了一下帽子。(彼は人に帽子をポンっとたたかれた。)(動量補語)

なお、角田(2009)では言及されていないが、以下のような所有物は、服装とは捉えにくい、「身につけるもの」という意味では衣類名詞と類似の性質を表している。

- (84) 我被人拉住了背包。(私は人にリュックをしっかりと引っ張られた。)(結果補語)
- (85) 我被流氓搶走了手機。(私はならず者に携帯を奪い去られた。)(結果補語)
- (86) 我被小偷偷了錢包。(私はすりに財布をとられた。)(4)の再掲)(使役動詞)

3.4. 愛玩動物

(64)の所有傾斜では、「衣類」に続いて「親族」があるが、「親族」の説明にも用いる「特定性」の概念に触れておくために、「愛玩動物」の類を先に見てみる。この類には、愛玩動物の他に家畜も属するが、所有者が動物に愛着を感じるという心理的な点、および所有者が身近な場所で動物を飼うという物理的な点では、所有者と所有物の関係が近いとされる(角田 2009: 128)。しかし、動物が意志性をもつ独立した個体で、所有者と一体ではない点では、所有者との緊密度がやや低いと考えられる。この点は、次の一連の文が示す現象から証拠づ

けられる。

- (87) a. ?? 我被人踢傷了狗。(私は人に犬を蹴られて怪我させられた。)
 a'. 我的狗被人踢傷了。(私の犬は人に蹴られて怪我した。)
 b. ?? 我被人踢傷了寵物狗。(私は人に飼い犬を蹴られて怪我させられた。)
 b'. 我的寵物狗被人踢傷了。(私の飼い犬は人に蹴られて怪我した。)
 c. 我被人踢傷了愛犬。(私は人に愛犬を蹴られて怪我させられた。)((5)の再掲)
 d. 我被人踢傷了家裡养的狗。
 (私は人に家で飼っている犬を蹴られて怪我させられた。)
- (88) a. ?? 他被人毒死了牛。(彼は人に牛を毒殺された。)
 a'. 他的牛被人毒死了。(彼の牛は人に毒殺された。)
 b. ? 他被人毒死了一頭牛。(彼は人に1頭の牛を毒殺された。)
 b'. 他的一頭牛被人毒死了。(彼の1頭の牛は人に毒殺された。)
 c. 這戶農家被人毒死了一頭牛。(この農家の人は人に1頭の牛を毒殺された。)

(87)では、使役性をもつ複合動詞“踢傷”(蹴って怪我させる)を用いた直接受身文(87a')と(87b')はいずれも自然であるが、それぞれに対応する所有受身文(87a)と(87b)の容認度が低い。この点では愛玩動物名詞を用いた所有受身文は、身体部分、属性、衣類を表す名詞を用いた所有受身文と異なる性質を示している。一方、(87a)と(87b)より高い容認度をもつ(87c)と(87d)を見ると、これらの文の唯一の相違点は目的語名詞句にある。具体的に言えば、(87a)の“狗”(犬)や(87b)の“寵物狗”(飼い犬)のような裸名詞は、いずれも生物学上の総称もしくは概念的なイメージとしての「犬」を表しており、現実世界にいる特定の「犬」を指していない。それに対し、(87c)の“愛犬”(愛犬)は「ある人が飼い犬としてかわいがっている犬」という意味を表しており、そこから「犬」の特定性(specificity)が読み取られる。また、(87d)の“家裡养的狗”(家で飼っている犬)も、「ある人が飼う」という条件の提示により「犬」に特定性を付与している。なお、このような限定成分の役割は、一見所有関係の明確化にあるように見えるが、(87b)の“寵物狗”(飼い犬)のような所有者の存在が暗示される名詞に変えても容認度が上がらないことや、後述する数量詞の付加で容認度が上がることから、特定性の付与にだけ関わると考えられる。

さらに、(88)では、自然な直接受身文(88a')と(88b')に比べると、それぞれに対応する所有受身文(88a)と(88b)の許容度はいずれも落ちるが、(88b)の許容度は(88a)よりやや高い。その原因は、(88b)の目的語名詞“牛”(牛)に数量詞“一頭”(1頭)がつくことにあると思われる。大河内(1985)では、中国語の名詞句に関して、数量詞の付加により、名詞句の指示対象が抽象性や総称性を失い、「個体化」を遂げるとしている。つまり、所有受身文では、所有者と所有物の緊密度が低い場合、所有物名詞句に特定性を付与する何らかの限定成分が要求されると考えられる。一方、(88c)の容認度が(88b)より高いのは、主語名詞を変えることによ

り、所有物が特定されやすくなり、所有者と所有物の緊密度が高く読み取れるためだと考えられる。

また、詳しく述べないが、次のような使役動詞を用いた文も、上述の使役性をもつ複合動詞と同じ傾向を示している。

- (89) a. ?? 我被人活埋了狗。(私は人に犬を生き埋めにされた。)
b. ?? 我被人活埋了寵物狗。(私は人に飼い犬を生き埋めにされた。)
c. 我被人活埋了愛犬。(私は人に愛犬を生き埋めにされた。)
d. 我被人活埋了家裡養的狗。(私は人に家で飼っている犬を生き埋めにされた。)

一方、衣類名詞と同じであるが、愛玩動物が所有物の場合、動量補語を加えることでは所有受身文の容認度は変わらない。

- (90) a. ?? 我被人踢了愛犬。(私は人に愛犬を蹴られた。)
b. ?? 我被人踢了兩腳愛犬。(私は人に愛犬を 2 回蹴られた。)(動量補語)

3.5. 親族

本節では続いて親族名詞を見る。親族を表す所有物名詞を用いた受身文のうち、次の文はよく典型例として挙げられる。

- (91) ?? 他被土匪殺了父親。
(彼はならず者に父親を殺された。)((8)と(37)の再掲)(使役動詞)
(92) ?? 我被人打傷了弟弟。(私は人に弟を殴られて怪我させられた。)(結果補語)

これらの文は、筆者の内省ではかなり逸脱した表現であるが、多くの研究において自然な文とされてきた(徐傑 2004 など)。そこで、筆者は複数名の異なる出身地の中国語母語話者に確認したが、彼らは全員筆者と同様な判断を示した。また、本稿と同様な判断を示す研究に、その他にも大野(1993)や馬志剛(2017)などがある。⁹本稿では、(91)(92)が不自然である原因は、(87)(88)と同様で、人間という個体が自立性が高く、典型的な所有物と捉えにくいということにあると考えられる。さらに、愛玩動物と異なり、数量詞や限定成分を加えることにより親族名詞に特定性を付与することができない。

- (93) a. * 他被土匪殺了 1 個父親。(彼はならず者に 1 人の父親を殺された。)
b. * 他被土匪殺了最愛的父親。(彼はならず者に最愛の父親を殺された。)

⁹ 馬志剛(2017)では“保留賓語被動句”としている。

(使役動詞)

3.6. 作品・その他の所有物

角田(2009)では「作品」と「その他の所有物」を別々に立てており、「作品」と所有者とがより近い関係をもつとしているが、本稿の扱う現象ではこの 2 種類の所有物について、性質的に特に大きな差が観察されていない。次の文では、“畫家的作品”(画家の作品)、“編劇的劇本”(脚本家のシナリオ)、“俄羅斯的情報人員”(ロシアのスパイ)、“美軍的戰鬥機”(米軍の戦闘機)はともに自然な所有関係になっているが、使役性をもつ動詞や複合動詞を用いた(94)~(97)の文では、それぞれの a 文の所有物名詞に数量詞や限定成分を加えて b 文にすれば容認度が高まるが、この点では(94)(95)の「作品」類と(96)(97)の「その他の所有物」類の間には全く差が感じられない。

- (94) a. ? 畫家被人燒毀了作品。(画家は人に作品を焼却された。)
 b. 畫家被人燒毀了好幾幅作品。(画家は人に何枚もの作品を焼却された。)
 (使役動詞)

- (95) a. ? 編劇被人偷了劇本。(脚本家は人にシナリオを盗まれた。)
 b. 編劇被人偷了還在創作中的劇本。
 (脚本家は人にまだ創作中のシナリオを盗まれた。)
 (使役動詞)

- (96) a. ? 俄羅斯被美國抓住了情報人員。
 (ロシアはアメリカにスパイを捕まえられた。)
 b. 俄羅斯被美國抓住了 12 名情報人員。
 (ロシアはアメリカに 12 名のスパイを捕まえられた。)
 (結果補語)

- (97) a. ? 美軍被敵方打落了戰鬥機。
 (米軍は敵側に戦闘機を撃ち落とされた。)
 b. 美軍被敵方打落了 2 架戰鬥機。
 (米軍は敵側に 2 機の戦闘機を撃ち落とされた。)
 (結果補語)

また、この類の所有物名詞は、限定成分がついていれば、使役性をもたない[+REM]や[+CONS]類の活動動詞とも共起可能である。

- (98) a. ? 畫家被人燒了作品。(画家は人に作品を燃やされた。)
 b. 畫家被人燒了好幾幅作品。(画家は人に何枚もの作品を燃やされた。)
 ([+REM])

- (99) a. ? 我被人喝了水。(私は人に水を飲まれた。)
b. 我被人喝了杯子裡的水。(私は人にコップの中の水を飲まれた。)
([+CONS])

しかし、次に示すように、この類の所有物名詞は、[+IMP]類の活動動詞と共起しにくい、それは所有物と所有者の緊密度が低いことによると考えられる。

- (100) a. ?? 俄羅斯被美國打了 12 名情報人員。
(ロシアはアメリカにスパイを殴られた。)
b. ?? 俄羅斯被美國打了 12 名情報人員。
(ロシアはアメリカに 12 名のスパイを殴られた。)
([+IMP])

また、衣類や愛玩動物の所有物を用いた文と同様で、動量補語を加えることでは文の容認度は上がらない。

- (101) a. ?? 美軍被敵方打了 2 下戰鬥機。(米軍は敵側に戦闘機を 2 回撃たれた。)
b. ?? 我被人喝了 2 口杯子裡的水。(私は人にコップの中の水を 2 口飲まれた。)
(動量補語)

ところが、3.3 節の「衣類」と異なり、服装であっても、身につけてない状態では「その他の所有物」の類に属するが、この場合、所有物名詞が裸の形式では許容されず、数量詞や限定成分が要求される。

- (102) a. ? 我被他穿走了衣服。(私は人に服を着て行かれた。)
b. 我被他穿走了 1 件衣服。(私は彼に 1 着の服を着て行かれた。)
c. 我被他穿走了今天準備穿的衣服。
(私は彼に今日着ようとする服を着て行かれた。)

ここで一旦まとめると、「その他の所有物」類の名詞は、使役性をもつ動詞や複合動詞と共起する場合、特定性を表す限定成分がつくと容認度が高まる点では「愛玩動物」類と同様であるが、使役性をもたない一部の活動動詞と共起できるのは、「身体部分」類と近い性質を示している。

3.7. 3 節のまとめ

3 節では、所有受身文の目的語位置に現れる様々な所有物名詞について、その所有関係の

緊密度により、それぞれどのような述語と共起できるのか、裸の形式または数量詞、限定成分がつく形式のいずれをとるのかを考察した。結論をまとめると、次のようになる。(所有物名詞が該当述語と共起可能な場合、○で高い容認度を示し、×で低い容認度を示す。共起不可能または該当しない場合は、斜め罫線で示す。)

表 1 所有物名詞と述語の共起状況およびその容認度一覧

		[+使役性]述語		[-使役性]述語			
		結果補語	使役動詞	[+REM]	[+IMP]	[+CONS]	動量補語
限定成分が必須 ではない	身体部分	○	○	○	○	/	○
	属性	○	○	/	/	/	/
	衣類	○	○	×	×	/	×
限定成分が必須	その他	○	○	○	×	○	×
	愛玩動物	○	○	/	×	/	×
/	親族	×	×	/	×	/	×

ここで、中国語の所有受身文で観察される所有傾斜の階層は、角田(2009)が提示した階層と違う傾向を示している。また、所有物名詞は基本的に使役性をもたない述語とは共起不可能であるが、「身体部分」や「その他」類の名詞は、受影性が比較的に読み取りやすい、[+REM]、[+IMP]、[+CONS]類の活動動詞や、動量補語を伴う活動動詞と共起可能である。

4. 結び

本稿では、中国語の直接受身文に現れる要素のうち、どのようなものが所有受身文で許容されるのか、また、述語のもつ使役性が所有受身文の容認度にどのように影響するのかを考察した。さらに、所有物と所有者の関係の緊密度が文の容認度にもたらす影響を分析した。結論は以下の通りである。

- A) 基本的に、所有受身文の述語には、意味構造に動作対象の状態変化が含まれる、という使役性をもつ動詞、または結果補語を伴う複合動詞が要求される。ただし、所有物が「身体部分」や「その他」類の名詞の場合、[+REM]、[+IMP]、[+CONS]という意味特徴をもつ活動動詞や、動量補語を伴う活動動詞が許容されることもある。
- B) 「身体部分」「属性」「衣類」類の所有物名詞は、数量詞や限定成分との共起が必須ではない。一方、「愛玩動物」や「その他」類の所有物名詞は、数量詞や限定成分との共起が必須である。なお、「親族」類の所有物名詞は許容されにくい。要するに、自立性が低い、かつ所有者と緊密な関係にある所有物の名詞は、許容される可能性が高い。

本稿では、これまで言及されることが少ない、中国語の所有受身文の容認度判断の問題について、その背後の原理をある程度明らかにした。しかし、残る問題も多い。特に「身体部分」や「その他」類の所有物名詞と共起可能な活動動詞に関して、その本質はまだ完全に解明できていない。これは、本稿の射程範囲を超えるものであり、今後の課題としたい。

参考文献

- 秋山淳 (2013) 「非使役義を表す結果補語について」『西南学院大学言語教育センター紀要』3: 15-19.
- 石村広 (2008) 『中国語の結果構文に関する研究—VR 構文の意味構造とヴォイス—』東北大学大学院文学研究科言語科学専攻(博士論文).
- 王亜新 (2016) 「日本語と中国語の受動文に見られる類似点と相違点」『人間科学総合研究所紀要』18: 41-63.
- 大野純子 (1993) 「中国語の受動文をめぐる」『藝文研究』64: 193-210. 慶應義塾大学藝文学会.
- 角田太作 (2009) 『世界の言語と日本語 改訂版: 言語類型論から見た日本語』くろしお出版.
- 熊仁芳 (2014) 「他動詞対格残存受身文の定義と範囲—日中対照研究の立場から—」『横浜商大論集』47 (2): 118-140.
- 楊彩虹 (2009) 「中国語受身文の成立条件—日本語との対照研究を通して—」NEAR conference proceedings working papers, NEAR-2009-10, 1-23.
- 路浩宇 (2014) 「他動詞が用いられる中国語の受身文について」『多元文化』14: 43-53.
- Shibatani, M. (1976) The grammar of causative constructions: a conspectus. In: Masayoshi Shibatani (ed.), *The Grammar of Causative Constructions (Syntax & Semantics 6)*, 1-42. New York: Academic Press.
- Vendler, Z. (1967) Verbs and times. In: Zeno Vendler (ed.), *Linguistics in Philosophy*, 97-121.
- 李臨定 (1980) 「“被”字句」『中國語文』6: 401-412.
- 馬志剛 (2017) 「漢語保留賓語被動句中賓語成分的格位形式、語類性質和題元角色研究—兼論漢語句式中的狹義領屬關係和復合動詞的形態組合」『海外華文教育』11: 1528-1537.
- 木村英樹 (1983) 「關於補語性詞尾“著/zhe”和“了/le”」『語文研究』7 (2): 22-30.
- 木村英樹 (1997) 「漢語被動句的意義特徵及其結構上之反映」『Cahiers de Linguistique Asie Orientale』26: 21-35.
- 徐傑 (2004) 『普遍語法原則與漢語語法現象』北京大學出版社.
- (陳琦 筑波大学大学院生)

Factors relevant to the acceptability of possessive passives in Mandarin Chinese

CHEN Qi

In this paper, we investigate several features observed in direct passives in Mandarin Chinese, both syntactically and semantically, to see if they are also applicable to possessive passives. Furthermore, we analyze how the causativity of the predicate and the closeness of the possessive relation between a possessor and a possession affect the acceptability of a possessive passive sentence.

The conclusion is summarized as follows. First, in possessive passives, causative predicates are usually preferred. However, if a non-causative predicate connotes a sense of strong affectivity, it may also be acceptable. Secondly, nouns that represent non-autonomous entities which are closely related to their possessors, are highly likely to be acceptable. For nouns that represent two certain types of possessions, it is possible to improve their acceptability by adding quantifiers and determiners to them, which produces an interpretation that they are closely related to their possessors.